

【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.2】

一般社団法人日本オーディオ協会 会長 小川 理子

私が入社した当時の松下電器の音響研究所は、百数十名のかなり大きな所帯。まだ昭和の時代。今ほどの変化の激しさやスピード感はなかった。

スピーカー開発、音場制御から、音声認識、磁気記録、電子楽器、騒音制御など、音に関する研究開発を幅広く担当していた。

大学時代に出会った、生体リズムの研究が大変面白く、音楽を構成する重要な三要素であるメロディ、ハーモニー、リズム、ということからも、音楽と人間と科学工学の接点を追求したいという気持ちが高まって、会社に入ってからリズムの本質を低音に見出すという仮説を検証したいと思っていた。

私は運良く第1希望の音響研究所に配属されたが、私の時代は同期の人数も多く、普通はなかなか希望通りには配属してもらえない中、就活時に何回か受けた面談でただただ音響の仕事がしたいという情熱だけは通じたのかもしれない。

もっと運が良かったのは、新入社員でスピーカー開発の音質評価をやらせてもらったことだ。今なおオーディオ協会でお世話になっている石井 伸一郎さんは、もうその頃は研究所にはいらっしやらなかったが、多くの先輩から、石井さんはスピーカーの大家でありテクニクスの名付け親だと頻繁にご高名をお聞きしていたので、そのような伝統ある仕事をさせていただけることは大変な喜びだった。

そのうえ、音響研究所にはジャズドラマーがいる、と配属前から聞かされていたが、なんと私は、そのドラマーである木村 陽一さんが室長をされていた開発室に仲間入りさせてもらった。

またそのうえに、私が入社した同じ四月に、新しく研究所長が着任され、その方がテクニクスのダイレクトドライブ方式ターンテーブルの生みの親である小幡 修一さんだった。

このように、小さい頃から音楽が好きで、ピアノを演奏して、大学時代にバンド活動をして、生体リズムの研究に出会い、様々なチャンスがベストミックスされて、オーディオ道と出会ったのである。

私が入社した1986年は男女雇用機会均等法の元年。とはいえ、全くそんな気配すら感じない時代だった。

当時は朝8時始まり。敷地内に工場もあり、製造ラインの方々と同じ時間帯で勤務していた。

女性の先輩方から、女性新入社員に役割が与えられたが、それが朝一番の部屋の清掃、整理整頓、お茶出しだった。私は毎朝5時前に起床して、6時半には出社して、部屋の清掃をしていたが、室のメンバーが出社するまでに30分から1時間の時間的余裕があったので、一人で研究所内の試聴室で音を聴いて耳を鍛え、感性の感度を高めることを自分に課した。

その頃は毎日が未知の世界における発見の連続で、とにもかくにも仕事が楽しく、自分の中のスポンジが、気づきや学びをどんどん吸収していくのがわかった。また純粋な気持ちから、こんなに多くのことを教えてもらったなら、お給料をもらうよりも授業料を払わなければいけないくらいだ、と思えるほどだった。

研究所内には、バイオリニストの辻 久子さんがいらっしゃって収録ができるほどの本格的なスタジオが設置されていた。ミキシングコンソール、モニタースピーカー、マイクロフォン、オープンリールデッキなど全てがプロ仕様の機材というだけでなく、スタインウェイのピアノや他の楽器類も装備されており、壁面には吸音材と反射材を装填した回転シリンダーが取り付けられ、空間の音響的諸条件を自在にコントロールできるようになっていた。

学生の頃、就活時に初めてこのスタジオを見せていただいた時には、やはり企業の研究所の設備は大学とは比べものにならないくらい凄い、と驚いたが、実際にそのスタジオに自由に入出入りができるようになった時には、一種のトキメキすら感じた。

やはりいいオーディオ機器で聴く音は違う。会社に入って、つくづく実感できた。

小さい頃、家には、父や兄が揃えていたダイヤトーンやビクターや様々ないいオーディオ機器はあったが、私は機器の性能よりも音楽そのものに夢中であり、成人してからさらに深く広く、オーディオという、また別の音楽の文化的側面を知ることができたのは、私の望外の喜びである。

今は、この私の経験に基づいて、もっと多くの若い方や女性に、新しい時代における上質な音を届けたいと思う。

次回に続く。。。